

9月



米代川と能代大橋



看板と描かれた町の象徴「シャチ」

あの日のあの川 リレー日記 ～第8話～



あの日のあの川
リレーDiary

みなさんはどこの川でどんなことをした記憶がありますか？幼少期や青春時代に体験した川での記憶を日記として掘り起こして語るコーナーです。リレー形式で毎回次の人にバトンをつなぎます。

第8話主人公 佐藤 達裕

(筑波大学社会・国際学群国際総合学類3年 白川(直)研究室『川と人』ゼミ)

(□川ガール・■川系男子)
(出身地を流れる川：秋田県能代市 米代川)

『米代川と僕』

いつのこと？：小学校高学年ころ
どこの川？：米代川

なんでもその昔、僕の生まれ育った秋田県能代市は、「木都能代」として日本はおろかアジアにおいても指折りの良質な木材の産出地として栄華を極めていたそうです。まちを流れる大きな河川・米代川は、その際に山間部で採取した木材を下流へ運ぶ交通の要として大いに活用され、まちの繁栄の一端を担っていました。木都としてのあの繁栄はどこかへ行ってしまった今となっても、米代川の水は地元の農業、工業、そして日常生活などさまざまなかたちで使用され、この川がいかにかこのまちの軸となっているかがうかがえます。

それほどに人々の生活と密着している米代川ですが、意外なことにそこを「遊びの場」として使っている人はあまり多くなかったような気がします。夏に水遊びをしようとするにしても、その際に候補として挙がるのはたいていプールか海であり、米代川がその候補地に挙がることはまずありませんでした。もっとも、能代市は下流のまちで水深も川幅も大きかったため、手軽に親しむという点では候補になりにくかったというのも事実でしょうが、今考えてみると少し不思議です。

まちに米代川との奇妙な距離感が漂うそのような中でも、一時期僕は米代川で遊んでいたことがありました。小学校高学年の頃だったか、2週間に1回程度の頻度ですが、米代川にウォータースポーツをしに出かけていたのです。どこかのNPOのものだったのでしょか、川沿いにそのための道具が一式揃えられた倉庫があり、そこから必要なものを借りて遊んでいました。そのある意味で貴重とも言える体験のなかでもとりわけ僕の記憶に残っているのが、カヤックに乗ったある日のことでした。

カヤックといえはいつもは10分も漕いでいるとすっかり飽きがきてしまい、出発地点からそう遠くないところをなんとなく漕いでその気になって帰ってくるのがお決まりでしたが、この日は何かが違った

のでしょうか。とつぜん遠くへ漕いでみようという気になった僕は、母親とともに能代市の一つのシンボルでもある、米代川にかかる大きな橋である能代大橋を目指すことにしました。

この日はよく晴れていたもので、カヤックをひとつ前に出すのにもたいへんに汗をかきました。しかも行きは流れとは逆方向です。水しぶきやら汗やらでもう全身びしょびしょになりながらも、僕はひたすらに橋を目指してオールで水をかきました。普段の僕だったらもう岸に戻っていてもおかしくないはずの時間でしたが、まだ進めるような気がしたのです。いや、もしかしたら行きの半分くらいで実は少し後悔をしていたかもしれないのですが、それでもその日は戻ることはしなかったのです。

気がついたとき、僕はもう橋より少しとびだしたところにいました。初めてたどり着いた大きな橋の大きな影は、それまでの暑さとは対照的に水辺のひんやりとした涼しさがありました。日陰と達成感のすがすがしさに浸り、すこししてほとぼりも冷め始めると、また少しオールを動かし始めました。帰りは流れに任せられたので、いくぶん楽でした。

今思えば、橋までの距離なんて実際には大したことはなかったのだと思います。時間にしても30分にも満たない短い時間の出来事だったと思うのですが、あの橋の下の空気の冷たい感じやオールを握る腕の筋肉の感じは、とても10年前の出来事であるとは思えないほど、鮮明に思い起こすことができます。

こうして振り返ってみると、米代川は能代市というまちのみならず、僕の人生においてもさりげなく、いまの僕を形作るうえで一つの軸となっていたのだと気づかされました。川と実際に触れ合って遊ぶという貴重な経験は、いまもなお僕の中で生き生きとしており、そこから得られた生きた感覚は、僕の人生をより鮮やかなものにしてくれるかけがえのないものとなっています。いつ手に入るかもわからないこういった感覚を、川を通して小さいころに得られたことは本当に幸せなことでした。この感覚はこれからも僕の中で生き続けるのでしようし、僕自身、これからもこの感覚を大切にしていきたいと思います。

(次は森本健太さんにバトンを託します)



米代川と河畔のまちなみ



河口付近に生えるはまなす